

# 状態自尊感情の日記法研究

——2項目自尊感情尺度紙筆版とWeb版の比較:大学生を対象に——

箕浦有希久・成田 健一

## 何のために状態自尊感情を測定するのか

状態自尊感情 (state self-esteem) には, 出来事の経験にともなってリアルタイムに生じる, 自己の現状把握としての側面がある。たとえば, 自尊感情と類似点の多い概念として自己評価 (self-evaluation) があり, 磯崎 (2009) は特性自尊感情 (trait self-esteem) と比べて状態自尊感情は自己評価の概念に近いものであると定義している。自尊感情と自己評価を対比的にとらえた場合, 自尊感情は自己に対する価値的感情や態度, 包括的評価を含んでおり, どちらかといえば包括的・安定的・感情的である。それに対して, 自己評価は, 自己のさまざまな側面に対する見方や判断といった認知的状態を意味しており, どちらかといえば多側面的・可変的・認知的である (磯崎, 2009)。

このような状態自尊感情の変動が果たしている適応上の役割について, 進化の視点から仮説が唱えられている。それは, 状態自尊感情は人が他者との関係性の良好さをモニターするためのメカニズムとして進化したと考える仮説である (Leary, 1999; sociometer theory, ソシオメーター理論)。すなわち, 状態自尊感情は成功や達成, 他者からの賞賛や受容といったポジティブ出来事の経験により上昇し, 反対に失敗や他者からの拒絶, 社会的排斥といったネガティブ出来事の経験により低下する, 計測機器のようなものとみなすことができる。社会生活の中で培われた高い自尊感情は現状がうまくいっていることを意味し, 反対に自尊感情が低下したときには現状を変化させるための方策に動機

づけられるという仕組みが想定されている (Leary & Baumeister, 2000)。

状態自尊感情は、人の自己価値の感覚が状況に応じて変化することを反映した概念である。しかしそれと同時に、自尊感情のような人の自己価値の感覚には、ある一定の平均的な調子があることも早くから指摘されている (James, 1892/1992)。これは特性自尊感情と呼ばれ、個人の自尊感情の一定期間を通じたベースライン的な高低を意味している。特性自尊感情と状態自尊感情がどのような関係性であるかについては、異なる意見が存在する。ひとつは状態自尊感情の長期的な平均値が特性自尊感情であるとみなす立場であり、もうひとつは状態自尊感情をいくら積み重ねたとしてもそれは特性自尊感情と等質ではない、という立場である。

前者の立場は状態自尊感情の連続線上に特性自尊感情があることを想定している。Rosenberg (1986) はこのとらえ方を野球選手のアナロジーによってうまく説明している。たとえ状態自尊感情が大きく変動したときであっても、ベースラインをあらわす特性自尊感情の変動はごくわずかであるということがありえる。それは例えるならば、ある野球選手に調子のいい試合もあればスランプの試合もある——つまり状態自尊感情が高いときもあれば、低いときもある——けれども、シーズン全体を通して平均的には優れた3割打者である——つまり特性自尊感情が高い——ということがありえるようなものである。

後者の立場からみた状態自尊感情の上下変動はあくまで、人が経験した出来事に対する一瞬の情動的反応として理解できるものである。それをいくら積み重ねたところで、自己に対する全般的な評価や感情である特性自尊感情と等質とは考えられない (Brown & Marshall, 2001; 2006)。このとらえ方は、現実の成功や達成といったポジティブ経験または失敗などのネガティブ経験の有無とはほとんど関係なく、高い自尊感情をもつ個人が存在することがなぜありえるかといった疑問を、整合的に説明できる可能性がある。

## どのようにして状態自尊感情を測定するのか

Rosenberg (1965) によって作成された 10 項目の心理尺度は、自尊感情を測定するためにもっとも広く用いられる方法である (Gray-Little, Williams, & Hancock, 1997; 並川・脇田・野口, 2010)。通常の場合、これは単発の測定で使用され、特性自尊感情の指標として用いられる。しかし、ある一時点において自尊感情を自己報告させているということから、測定時点における状態自尊感情の指標とみなされることもないわけではない。実際、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度を 1 週間毎晩くり返し使用する研究では、同一の個人を毎晩くり返し測定し、得られた複数回の特性自尊感情得点の標準偏差を算出し、自尊感情の変動性の指標として用いている (Kernis, Grannemann, & Mathis, 1991)。なぜこのようなことが成立するかというと、特性自尊感情尺度の得点であっても、回答者の回答時の気分や直前までの出来事の実験など、状態的な要因による変動が毎回の回答に含まれているためだと考えられる。

Kernis, Grannemann, & Barclay (1989) は、質問項目には Rosenberg (1965) の尺度をそのまま使用しながら、調査対象者に“この瞬間、どのように感じているか”を回答するよう教示する方法で状態自尊感情を測定した (他にも、市村 (阿部), 2011; Kernis et al., 1991 など)。類似した方法として、質問項目には Rosenberg (1965) の尺度を使用し、調査対象者に“今日一日のことについて”回答するよう教示するものもある (福沢・山口・先崎, 2013; 脇本, 2008, 2010)。また、既存の特性自尊感情尺度の項目自体を改変・削除する方法として、阿部・今野 (2007) は Rosenberg (1965) の特性自尊感情尺度を基盤として、9 項目の状態自尊感情尺度を開発している。

このように特性自尊感情の測定尺度をほぼそのまま状態自尊感情の指標として利用する方法もある。一方で、既存の特性自尊感情尺度は十分に高い測定の時間的 (経時的) 安定性、すなわち信頼性 (reliability) が確認されていることから、可変的な状態自尊感情の指標として利用するのには適していないとい

う指摘もある (Heatherton & Polivy, 1991)。状態自尊感情を測定するために新たに開発された尺度には、Heatherton & Polivy (1991) の *state self-esteem scale* がある。この尺度は *performance*・*social*・*appearance* の3因子から構成されており、自己全体に対する全般的な評価や感情というよりも、自分自身の個別の側面に対する自己評価に近い内容として状態自尊感情をとらえている。

### 少数項目尺度による状態自尊感情測定の特長

現状で状態自尊感情は上述した方法によって測定されているが、状態自尊感情研究における測定上の課題として、状態自尊感情の測定を短時間で簡潔に実施する必要性があげられるだろう。状態自尊感情研究には大きく2つの文脈があると言われている (市村, 2012)。第一の文脈では、実験操作の前後や最中に質問紙を用いて状態自尊感情を測定している (たとえば、田端・池上, 2011; Vohs & Heatherton, 2004 など)。実験中の測定に要する時間や認知的負荷が大きくなるほど、実験操作が被験者にもたらした影響の減衰や消滅を招くおそれがあるため、短時間で状態自尊感情の測定を完了させる必要性があらう。第二の文脈では、日記式調査に代表される方法で日常場面でくり返し状態自尊感情を測定している (たとえば、市村 (阿部), 2011; Kernis et al., 1989; Kernis et al., 1991 など)。これらは一定期間に同一人物に対して連日くり返し回答を求める方法であるため、調査全体として回答者に求める労力大きい。労力大きいことによって途中脱落者が多くなれば、有効回答者が労力や負担を厭わず真面目に回答する人のみの偏った特徴のサンプルとなってしまうおそれがある。したがって日記式調査における状態自尊感情の測定は、回答者に求める労力をなるべく抑えて、簡潔に実施できることが望ましい。つまり第一、第二のいずれの文脈の研究であっても、状態自尊感情の測定においては、簡潔に素早く実施する必要がある。

状態自尊感情を短時間で簡潔に測定する方法の一つに、既存尺度よりも項目

数の少ない尺度を利用することが挙げられる。特性自尊感情を測定している近年の研究を概観してみれば、大規模なパネル調査などにおいて特性自尊感情を短時間で簡潔に測定する必要性から、わずか1項目や2項目といったきわめて少ない項目数の尺度が開発されている (Robins, Hendin, & Trzesniewski, 2001; 箕浦・成田, 2013 a)。これらの尺度では、少ない項目数であっても測定概念を包括的にとらえるために、尺度項目の表現や構成に工夫が凝らされており、測定の妥当性が確保されている。箕浦・成田 (2016 a) は、Kernis et al. (1989) や阿部・今野 (2007) などいくつかの先行研究の方法にならない、少数項目の特性自尊感情尺度を使用する際の教示や項目の表現を一部改変する方法によって、新たに少数項目の状態自尊感情尺度を開発している。

## 本研究の目的

箕浦・成田 (2016 a) では、Web 調査アンケートモニターの一般成人を対象として7日間の日記式調査をおこない、ポジティブ・ネガティブ出来事の経験、多面的感情状態、状態自尊感情を測定した。2項目自尊感情尺度と出来事の経験や感情状態との相関関係から、状態自尊感情は、ポジティブな出来事や感情を経験すると高く、ネガティブな出来事や感情を経験すると低いことが示され、2項目自尊感情尺度による状態自尊感情測定の構成概念妥当性が確認されている。

先行研究の限界として、調査対象者がインターネット調査会社に登録されたモニターからのサンプリングに限られていること、調査方法がインターネットを介した Web 調査のみであることが挙げられる。そこで本研究では、大学生サンプルを対象として、紙筆版の質問紙調査と Web 版の調査の両手法を用いて、2つの調査を実施して比較を行った。これにより、回答者の世代を恒常化させ統制した上で、紙筆調査法・Web 調査法という手続き的な側面において研究結果の異同を検討したい。もちろん、理想を言えば、全人口を母集団としてそこからランダムにサンプリングした無作為抽出法に基づく調査をおこなう

Table 1 本研究の位置づけ

			有意抽出法	
			調査会社 登録モニタ	大学生 サンプル
2 項目自尊感情尺度 を用いた自尊感情の 複数回測定の研究	紙筆版	△	○	本研究 Study 1
	Web 版	×	箕浦・成田 (2016 a)	本研究 Study 2

注) ○は物理的に実施可能なことを (ただし費用は莫大なものとなる), △は実施が困難なことを, ×は実施が事実上不可能なことを意味する。△と×に関して述べるならば, そもそも無作為に抽出された調査対象者に, 通常の 1 回だけの調査を行っても, 現状では回収率が 50% にも満たない (ましてや無作為に選ばれた対象者にインターネットを介した Web 調査を行うことは事実上不可能であると言わざるを得ない)。その上, 同一人物に複数回の回答を求めるという作業を課した場合, 回答率はさらに大幅に減少することが予想される。加えて, それにもかかわらず回答を行うという人には, なにか別の様々なバイアスが入っていると考えざるを得ないだろう。

ことが望ましい。しかし現実的には, ほとんどすべての心理学の研究において, 費用やその他の制約のために無作為抽出法による検討はできていない。無作為抽出法に基づく調査の実施が, 複数回測定を行う場合には特に困難である以上, 有意抽出法による検討を多数のサンプル・複数の異なった方法論から積み重ねていくことが重要といえるだろう。本研究および先行研究の位置づけを Table 1 に示した。

Study 1 紙筆版質問紙調査による状態自尊感情の複数回測定

調査の時期・対象・手続き

本調査は 2013 年 11 月から 2014 年 1 月にかけて実施した。調査参加者は関西圏・北陸圏の私立大学の学生であった。大学の講義内で調査参加に関する説明と協力依頼をおこなった。調査参加者には 7 日間分の回答用紙をまとめた冊子を手渡し, 毎晩回答をおこなうように教示した。調査参加者にはメールアドレスの情報提供を求めた。紙筆版調査では毎晩 19 時頃に調査参加者の

メールアドレス宛に回答リマインダメールを送信し、当日分の質問紙に回答するよう指示した。

大学生 216 名に対して、7 日間毎晩同一の質問に回答する日記調査への参加を依頼し、承諾を得た。そのうち 102 名から調査票を回収し、1 週間の回答日数が 5 日以下の者は分析から除外した上で、無効回答を除く 87 名（女 60, 男 24, 不明 3）、平均年齢 20.11 歳（SD = 0.86, 範囲：18-22）を分析対象とした。

### 測定内容

**状態自尊感情** 状態自尊感情の指標として 3 種類の心理尺度を使用した。第一は、状態 2 項目自尊感情尺度（箕浦・成田, 2016 a）である。これは箕浦・成田（2013 a, 2013 b）によって開発された、全 2 項目から構成される特性自尊感情の測定尺度である 2 項目自尊感情尺度（Two-Item Self-Esteem scale: TISE）の改変版である。状態自尊感情を測定するため、阿部・今野（2007）の方法にならって特性 2 項目自尊感情尺度の項目の文頭・文末を改変している。項目表現は“いま、自分にはいろいろな良い素質があると感じる”, “いま、自分のことを好ましく感じる”であった。以下“2 項目尺度”と呼ぶ。

第二は、阿部・今野（2007）の状態自尊感情尺度である。この尺度は Rosenberg（1965）の自尊感情尺度 10 項目の一部を削除したり表現を改変したりしたもので、状態自尊感情を計 9 項目で測定している。以下“9 項目尺度”と呼ぶ。

第三は、Heatherton & Polivy（1991）による State Self-Esteem Scale の邦訳版（館・宇野, 2000）である。可変的な状態自尊感情を測定することを目的として開発された計 20 項目の尺度である。以下“20 項目尺度”と呼ぶ。なお、本尺度は箕浦・成田（2016 a）では利用していないため、本研究の Study 1 において初めてその結果を示すことができる変数である。

状態自尊感情の 3 指標はすべて、“今、この瞬間、あなたは次のような特徴

がどのていど自分にあてはまると思いますか”という教示のもと、各項目への評定を求めた。評定は双極の5件法（1. あてはまらない, 2. どちらかというとあてはまらない, 3. どちらともいえない, 4. どちらかというとあてはまる, 5. あてはまる）であった。

**出来事の実験頻度** 市村（2012）で使用された、ポジティブ・ネガティブ出来事の実験頻度を測定する項目を利用した。ポジティブ出来事6項目（人にほめられた, など）とネガティブ出来事6項目（人にけなされた, など）を使用した。“今日, 次のような出来事がありましたか”と教示し, 単極の4件法（1. 全くなかった, 2. わずかにあった, 3. 時々あった, 4. たくさんあった）で評定を求めた。

**感情状態** 市村（2012）で使用された, 多面的感情状態尺度（寺崎・岸本・古賀, 1992）の下位尺度から選出された2項目ずつを利用した。ポジティブ感情として活動的快（活気のある, 元気いっぱい）、非活動的快（のんびりとした, おっとりとした）、親和（いとおしい, 愛らしい）を, ネガティブ感情として抑鬱・不安（不安な, くよくよした）、敵意（憎らしい, 敵意のある）、倦怠（だるい, つまらない）を使用した。“今, この瞬間のあなたの状態について, 以下の質問にお答えください”という教示のもと, 各項目への評定を求めた。双極の4件法（1. 全く感じていない, 2. あまり感じていない, 3. 少し感じている, 4. はっきり感じている）で評定を求めた。

これら全尺度の尺度得点はすべて調査日ごとに, 逆転項目は評定値を逆転した上で各尺度の評定値の単純加算によって合計得点を算出した。調査用紙には他の研究目的のために利用される質問項目も含まれていた。

## 分析の概要

本研究では基本的に, 箕浦・成田（2016 a）と同様の枠組みの分析を, 異なるサンプル・調査法によって得られたデータを用いて行い, 状態2項目自尊感情尺度の信頼性・妥当性を再検討する。

分析のうち, 併存的妥当性の検討にあたる内容を（a）と呼称する。（a-1）



は 2 項目尺度と 9 項目尺度の両尺度の計 11 項目のジョイント主成分分析である。(a-2) は調査期間中の調査日ごとにおこなった 2 項目尺度・9 項目尺度・20 項目尺度の相関分析である。(a-3) は調査期間中の 7 日間を通した 2 項目尺度・9 項目尺度・20 項目尺度の個人内相関値の検討である。各個人の個人内相関値には Fisher の  $z$  変換をおこない (Spörrle & Bekk, 2014), 全員の個人内相関値を基に母相関係数の推定値を算出する (芝・南風原, 1990)。

分析のうち, 構成概念妥当性の検討にあたる内容を (b) と呼称する。(b-1) は調査日ごとの 2 項目尺度とポジティブ・ネガティブな変数との相関分析である。(b-2) は 2 項目尺度とポジティブ感情およびネガティブ感情の個人内相関値の検討である。(b-3) は調査日ごとのポジティブ・ネガティブ出来事得点の極値を用いた, 状態自尊感情尺度得点の日間における平均値の個人内比較である。いずれの分析も 9 項目尺度・20 項目尺度も同様に使用し, 結果を対比させながら検討する。

## 結 果

調査日ごとの基礎統計量を Table 2 に示した。

### 併存的妥当性の検討

(a-1) 主成分分析 2 項目尺度と 9 項目尺度の全 11 項目による主成分分析を調査日ごとに実施した。7 日間を通して, 全 11 項目中で 2 項目尺度の各項目が示す主成分負荷量は最大 .86, 最小 .75 であった。同様に 9 項目尺度の各項目が示す主成分負荷量は最大 .90, 最小 .36 であった。2 項目尺度の各項目が, 7 日間のいずれの日でも高い主成分負荷量を一貫して示していたのに対して, 9 項目尺度の主成分負荷量は項目によってばらつきがみられた。

(a-2) 相関分析—調査日ごとの検討 併存的妥当性を検討するために, 2 項目尺度と 9 項目尺度の相関値を調査日ごとに算出した結果, 7 日間すべてで  $r = .72$  以上という強い相関関係が一貫してみられた。同様に 2 項目尺度と 20



Table 3 紙筆版調査と Web 版調査における各変数間の相関係数の 7 日間中の最大値および最小値

	2 項目尺度						9 項目尺度						20 項目尺度					
	紙筆版調査			Web 版調査			紙筆版調査			Web 版調査			紙筆版調査			Web 版調査		
	7 日間 中の 最大値	7 日間 中の 最小値	7 日間 中の 最大値	7 日間 中の 最大値	7 日間 中の 最小値	7 日間 中の 最小値	7 日間 中の 最大値	7 日間 中の 最小値	7 日間 中の 最大値	7 日間 中の 最大値	7 日間 中の 最小値	7 日間 中の 最小値	7 日間 中の 最大値	7 日間 中の 最大値	7 日間 中の 最小値	7 日間 中の 最大値	7 日間 中の 最小値	7 日間 中の 最小値
9 項目尺度	.87***	.72***	.84***	.72***	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20 項目尺度	.61***	.48***	—	—	.76***	.65***	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ポジティブ出来事	.47***	.35**	.58***	.19	.46***	.33**	.52***	.24	.26*	.14								
ネガティブ出来事	.04	-.07	.21	-.16	-.04	-.26*	.04	-.26*	-.08	-.25*								
紙筆版																		
Web 版																		
活動的快感情	.52***	.44***	.53***	.39**	.56***	.43***	.49***	.31*	.36**	.17								
非活動的快感情	.41***	.24*	—	—	.43***	.24*	—	—	.29**	.13								
親和	.60***	.37**	—	—	.46***	.30**	—	—	.36**	.10								
抑鬱・不安	-.08	-.26*	-.04	-.32*	-.30**	-.44***	-.23	-.56***	-.29**	-.52***								
ネガティブ敵意	-.01	-.19	.18	-.17	.00	-.38***	.12	-.23	-.12	-.29**								
感情倦怠	-.21	-.46***	.21	-.24	-.19	-.59***	.11	-.40**	-.32**	-.44***								

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

注) 調査日全体における  $df$  の範囲は、紙筆版調査では 81 から 87 であり、Web 版調査では 63 から 66 であった。

Table 4 紙筆版調査と Web 版調査それぞれの個人内相関分析における母相関係数の推定値

	2 項目尺度			9 項目尺度			20 項目尺度		
	紙筆版調査		Web 版調査	紙筆版調査		Web 版調査	紙筆版調査		紙筆版調査
	母相関係数の推定値	<i>n</i>		母相関係数の推定値	<i>n</i>		母相関係数の推定値	<i>n</i>	
状態自尊感情									
9 項目尺度	.73	78	.81	62	—	—	—	—	—
20 項目尺度	.37	79	—	.54	86	—	—	—	—
ポジティブ感情	.30	79	.33	63	.40	.46	.65	.27	.87
ネガティブ感情	-.30	79	-.33	63	-.58	-.39	.66	-.35	.87

注 1) 2 変数のどちらから一方でも標準偏差が 0 の場合、個人内相関値は算出できないため、母相関係数の推定値ごとに分析対象者は異なる

注 2) ポジティブ感情の測定内容は、紙筆版では「活動的快」「非活動的快」「親和」であり、Web 版では「快感情」であった。ネガティブ感情の測定内容は、紙筆版では「抑鬱・不安」「敵意」「倦怠」であり、Web 版では「不安」「怒り」「傷つき」であった。

Table 5 紙筆版調査と Web 版調査それぞれにおけるポジティブ・ネガティブ出来事得点の最大日・最小日間の状態自尊感情尺度得点の個人内比較

	ポジティブ出来事得点				df	t	ネガティブ出来事得点				df	t
	最大日		最小日	最大日			最小日					
	m	SD		m				SD	m	SD		
紙筆版調査												
2 項目尺度得点	6.27	2.19	5.67	1.98	86	3.67***	5.59	2.00	6.12	2.03	84	2.98**
9 項目尺度得点	29.76	7.82	26.67	7.40	86	5.61***	26.32	8.10	29.11	7.45	84	4.26***
20 項目尺度得点	56.06	10.92	53.81	11.38	86	2.78**	52.40	10.95	55.76	10.72	84	3.80***
Web 版調査												
2 項目尺度得点	6.05	2.16	5.44	2.11	78	2.73**	5.59	2.08	5.64	2.06	78	0.25 ns
9 項目尺度得点	29.68	8.05	25.99	7.99	78	5.27***	26.27	8.39	28.16	7.54	78	3.02**

\*\*\**p* < .001, \*\**p* < .01, \**p* < .05

項目尺度の相関値は  $r = .48$  以上, 9 項目尺度と 20 項目尺度の相関値は  $r = .65$  以上であった (Table 3)。

(a-3) 個人内相関分析—個人ごとの検討 各個人から得られた 7 日間の回答をもとに, 2 項目尺度と 9 項目尺度の個人内相関値を算出した。2 項目尺度と 9 項目尺度の個人内相関値に基づいた母相関係数の推定値は  $.73$  という値を示した。同様にして個人内相関値に基づいた母相関係数の推定値は, 2 項目尺度と 20 項目尺度で  $.37$ , 9 項目尺度と 20 項目尺度で  $.54$  という値を示した (Table 4)。

### 構成概念妥当性の検討

(b-1) 相関分析—調査日ごとの検討 次に構成概念妥当性を検討するために, 2 項目尺度とポジティブ出来事やポジティブな感情 (非活動的快, 活動的快, 親和) との間の相関を調査日ごとに算出した。その結果, 7 日間すべてにおいて  $r = .24$  から  $r = .60$  の中程度の有意な正の相関値がみられた。同様に, 2 項目尺度とネガティブ出来事やネガティブな感情 (抑鬱・不安, 敵意, 倦怠) との間の相関を求めたところ, 7 日間すべてにおいて,  $r = .04$  から  $r = -.46$  の無相関あるいは中程度の有意な負の相関値がみられた。9 項目尺度と 20 項目尺度においてもおおむね同様の相関関係が認められた (Table 3)。

(b-2) 個人内相関分析—個人ごとの検討 次に, 各個人から得られた 7 日間の回答をもとに, 2 項目尺度とポジティブ感情 (活動的快, 非活動的快, 親和の合計得点) およびネガティブ感情 (抑鬱・不安, 敵意, 倦怠の合計得点) との個人内相関値を求め, 母相関係数の推定値を算出した。また, 同一の分析を 9 項目尺度と 20 項目尺度に対してもおこなった。ポジティブ感情と 2 項目尺度には  $.30$ , 9 項目尺度には  $.40$ , 20 項目尺度には  $.27$  という正の母相関値が共通して確認された。ネガティブ感情と 2 項目尺度には  $-.30$ , 9 項目尺度には  $-.33$ , 20 項目尺度には  $-.35$  という負の母相関値が共通して確認された (Table 4)。

(b-3) 得点の個人内日間比較分析—ポジティブ出来事・ネガティブ出来事

を基準として 調査対象者個人が 7 日間で経験したポジティブ出来事得点の最大日と最小日を同定し、当該の日の間で状態自尊感情尺度得点について対応のある  $t$  検定を実施した。その結果、ポジティブ出来事得点の最大日においては最小日よりも、2 項目尺度 ( $t(86) = 3.67, p < .001$ )・9 項目尺度 ( $t(86) = 5.61, p < .001$ )・20 項目尺度 ( $t(86) = 2.78, p < .01$ ) のすべてにおいて、有意に高い得点を示した (Table 5)。ネガティブ出来事得点についても、ポジティブ出来事得点と同じ分析方針に基づいて分析をおこなった。その結果、ネガティブ出来事得点の最大日においては最小日よりも、2 項目尺度 ( $t(84) = 2.98, p < .01$ )・9 項目尺度 ( $t(84) = 4.26, p < .001$ )・20 項目尺度 ( $t(84) = 3.80, p < .001$ ) のすべてにおいて、有意に低い得点を示した (Table 5)。

以上、ポジティブ出来事、並びにネガティブ出来事の最大最小のいずれも、状態自尊感情の 3 指標は予測と一致したほぼ同じ傾向の値を示した。つまり、個人内でポジティブ出来事得点が最大の日（これはポジティブ出来事経験が最多の日を意味する）には状態自尊感情が最大となり、同様に個人内でネガティブ出来事得点が最大の日（これはネガティブ出来事経験が最多の日を意味する）には状態自尊感情が最小となることが確認された。

## Study 2 Web 版質問紙調査による状態自尊感情の複数回測定

### 調査の時期・対象・手続き

本調査は 2016 年 9 月 23 日から 2016 年 11 月 17 日にかけて実施した。調査参加者は関西圏の私立大学の学生であった。大学の講義内で調査参加に関する説明と協力依頼をおこなった。調査参加者には氏名やメールアドレスの情報提供を求め、その後はメールを通じて Web 版調査への回答方法を伝えた。Web 版調査では每晚 17 時頃に調査参加者に URL を添付したメールを送り、URL にアクセスして質問に回答するよう指示した。同時に注意事項として以下の 3 点を記載した。第一は 24 時を越えるとアクセスができなくなること、

第二は回答を忘れた日は次の日に送られてくるメールに添付してある URL にアクセスすることで再び調査に参加できること、第三は他人にメールを転送しないことであった。回答する Web ページの作成にはオンラインアンケート作成サービスの Qualtrics を使用した。調査参加者ごとに異なる URL を作成し、毎日同じ URL を同じ調査参加者に送信するメールの本文に添付して回答を求めた。

Web 版調査では 1 週間の回答日数が 4 日以下の者は分析から除外した。Web 版調査に参加した 160 名のうち有効回答者は 79 名（男性：15 名、女性：64 名）であり、平均年齢は 18.91 歳（範囲：18-21）であった。

## 測定内容

**状態自尊感情および出来事の実験頻度** 状態自尊感情の指標として“20 項目尺度”を使用しなかったこと以外は、Study 1 とまったく同一であった。

**感情状態** 岡田（2009）の対人的拒絶における感情経験の測定項目と、箕浦・成田（2012）の対人的拒絶の直後反応尺度の一部の、計 12 項目を使用した。本研究では、快感情（うれしい、楽しい、幸せな）をポジティブ感情の指標とみなした。また不安（不安な、心配な、気がかりな）、怒り（怒った、腹立たしい、憎らしい）、傷つき（傷ついた、ショックを受けた、胸が痛んだ）をネガティブ感情の指標とみなした。「いま、この瞬間のあなたの状態について、以下の質問にお答えください」という指示のもと、各項目への評定を求めた。評定は「1：感じない」～「4：感じる」の 4 段階であった。

Web 版調査では他にパーソナリティ特性や天気に関する質問をおこなっていた。また Web 版調査とは別に、大学の講義内で紙筆版質問紙調査による心理変数の測定もおこなったが、それらについては本研究では分析の対象としない。

## 結 果

調査日ごとの基礎統計量を **Table 2** に示した。

### 併存的妥当性の検討

(a-1) 主成分分析 2 項目尺度と 9 項目尺度の全 11 項目による主成分分析を調査日ごとに実施した。7 日間を通して、全 11 項目中で 2 項目尺度の各項目が示す主成分負荷量は最大 .84, 最小 .72 であった。同様に 9 項目尺度の各項目が示す主成分負荷量は最大 .84, 最小 .48 であった。

(a-2) 相関分析—調査日ごとの検討 併存的妥当性を検討するために、2 項目尺度および 9 項目尺度との相関値を調査日ごとに算出した結果、7 日間すべてで  $r = .72$  以上という強い相関関係が一貫してみられた (**Table 3**)。

(a-3) 個人内相関分析—個人ごとの検討 各個人から得られた 7 日間の回答をもとに、2 項目尺度と 9 項目尺度の個人内相関値を算出した。2 項目尺度と 9 項目尺度の個人内相関値に基づいた母相関係数の推定値は .81 という値を示した (**Table 4**)。

### 構成概念妥当性の検討

(b-1) 相関分析—調査日ごとの検討 次に構成概念妥当性を検討するために、2 項目尺度とポジティブ出来事やポジティブな感情（快感情）との間の相関を調査日ごとに算出した。その結果、7 日間すべてにおいて  $r = .19$  から  $r = .58$  の正の相関値がみられた。同様に、2 項目尺度とネガティブ出来事やネガティブな感情（不安、怒り、傷つき）との間の相関を求めたところ、7 日間すべてにおいて、 $r = .21$  から  $r = -.32$  の無相関から有意な負の相関値までがみられた。9 項目尺度においても予測と一致した同様の相関関係が認められた (**Table 3**)。

(b-2) 個人内相関分析—個人ごとの検討 次に、各個人から得られた 7 日



間の回答をもとに、2項目尺度とポジティブ感情（快感情の得点）およびネガティブ感情（不安、怒り、傷つきの合計得点）との個人内相関値を求め、母相関係数の推定値を算出した。また、同一の分析を9項目尺度に対してもおこなった。2項目尺度とポジティブ感情には .33, 9項目尺度とポジティブ感情には .46 という正の母相関値が双方ともに確認された。また、2項目尺度とネガティブ感情には -.33, 9項目尺度とネガティブ感情には -.39 という負の母相関値が双方ともに確認された（Table 4）。

（b-3）得点の個人内日間比較分析—ポジティブ出来事・ネガティブ出来事を基準として 調査対象者個人が7日間中で経験したポジティブ出来事得点の最大日と最小日を同定し、当該の日の間で状態自尊感情尺度得点について対応のある  $t$  検定を実施した。その結果、ポジティブ出来事得点の最大日においては最小日より、2項目尺度 ( $t(78) = 2.73, p < .01$ ) および9項目尺度 ( $t(78) = 5.27, p < .001$ ) の双方ともが、有意に高い得点を示した（Table 5）。ネガティブ出来事得点についても、ポジティブ出来事得点と同じ分析方針に基づいて分析をおこなった。その結果、ネガティブ出来事得点の最大日においては最小日より、9項目尺度 ( $t(78) = 3.02, p < .01$ ) は、有意に低い得点を示したが、2項目尺度 ( $t(78) = 0.25, ns$ ) では差がみられなかった（Table 5）。

## 考 察

本研究の Study 1（紙筆調査）および Study 2（Web 調査）において、状態2項目自尊感情尺度と他変数の関わりは、予測と矛盾なく先行研究とほぼ同様にみられた。また状態自尊感情に関わる各変数の平均値についても両調査法において、大きな差は見られていない。したがって、紙筆調査法・Web 調査法といった測定手続きの違いにかかわらず、両調査法は同様に利用できることが明らかになった。さらに言うならば、2項目自尊感情尺度による状態自尊感情測定の併存的妥当性および構成概念妥当性が、基本的には再確認されたともいえよう。

唯一、先行研究と相違のあった部分として、Web 版調査におけるネガティブ出来事得点の最大日・最小日間の状態自尊感情得点の個人内比較が挙げられる。この結果のみ、最大日と最小日の間で 2 項目尺度得点のみ有意な差がみられなかった。このような相違が Study 1 の紙筆版調査ではみられず、Study 2 の Web 版調査でのみ確認されたという点は十分な説明をすることが難しい。

強いて言うならば、状態 2 項目自尊感情尺度の平均値が、箕浦・成田 (2016 a) よりも、本研究の Study 1 (紙筆調査) および Study 2 (Web 調査) でともに若干低く、さらに Study 2 (Web 調査) のその値は相対的にやや低い値であったことが影響しているかもしれない。いわゆる床効果の可能性が考えられる。もうひとつ、ネガティブ感情との関係であったことも注目しておくべきかもしれない。たとえば特性自尊感情においてもネガティブ感情との関係は一貫していない。利用する尺度・方法を問わず、自尊感情とネガティブ感情が必ずしも有意な負の相関を示すとは限らないことが示されている (箕浦・成田, 2013 a など)。したがって、本研究の結果から紙筆調査法・Web 調査法といった方法論が、上述の結果の原因であると結論づけることには、慎重であるべきだろう。この点は、より検討を要する課題となる。

## 2 項目自尊感情尺度による状態自尊感情測定の有用性

本研究によって、2 項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情測定の妥当性が確認された。この方法は従来よりも少ない項目数での測定が可能であるため、状態自尊感情を測定するために要する時間や労力を最小限にすることができる。測定が時間をかけず迅速に済むということは、実験場面における操作や手続きを妨害しにくいことを意味する。これまで実行することが困難であった実験計画や研究対象で状態自尊感情の測定をおこなう可能性が広がるだろう。たとえば、きわめて短時間の内に状態自尊感情尺度に複数回評定させる研究や、スポーツ競技・演舞演奏・スピーチといったパフォーマンス活動や集団討議・グループワークといった相互作用場面の直前・途中・直後における測定、などが考えられる。

もうひとつ別のメリットとして、研究上の主目的ではない場合でも状態自尊感情が測定される機会が増えると考えられる。実験の操作チェックや統制変数として利用したり、探索的に測定することで思いがけず新たな発見につながるといった可能性もあるだろう。もちろん状態自尊感情を少ない項目数で測定することは、従来の研究においても、独自の判断によって既存尺度から一部の項目を選出して測定を試みることができなかったわけではない。しかしその場合は、選出した項目による測定の妥当性、および他の研究結果との比較の困難さ、といった点で問題が残る。本研究では2項目自尊感情尺度による状態自尊感情測定の妥当性を確認することができた。今後はそれぞれの研究者によって異なる少数項目を用いるのではなく、2項目自尊感情尺度を共通して利用することで結果の相互比較が容易になるだろう。

実際、本研究では、状態自尊感情とポジティブな出来事の実験——たとえば、成功や達成、他者からの受容や賞賛——およびネガティブな出来事の実験——たとえば、失敗、他者からの拒絶や叱責——との共変関係が認められた。本研究の結果から、2項目自尊感情尺度を用いて、日々の出来事の実験に応じて状態自尊感情が容易に変化する人とそうでない人を区別することが可能であろうと考えられる。ただし本研究では、実際に2項目自尊感情尺度を用いてセキユア-脆弱な自尊感情を区別することが可能であるか否かは検討できていない。その点を確認するためには、日々の出来事の実験や状態自尊感情の変化とともに、脅威への防衛や攻撃を含む自尊感情回復のためのさまざまな対処行動に注目していく必要があるだろう。

## 今後の展望

本研究によって2項目自尊感情尺度による状態自尊感情測定の妥当性は、ひとまず十分に確認することができたと考えている。ただし、心理尺度に関して安易に「妥当性が確認された」と判断したり、「みそぎ」が済んだとみなしたりすることの危険性にも気を配らなければならない（吉田・石井・南風原, 2012）。2項目自尊感情尺度による状態自尊感情測定の妥当性検討について

も、これから解決すべき点として大きく2点を挙げたい。すなわち、1つ目は状態自尊感情研究における2つの文脈（実験的文脈と日常的な文脈）のうちまだ十分に検討されていない実験的文脈における妥当性確認の重要性であり、2つ目は自尊感情と適応の関係を深く理解するための視点（セキュア-脆弱な自尊感情）から見た、構成概念妥当性のさらなる検討の必要性である。

まず、第一の点について、本研究では状態自尊感情測定の妥当性を日記式調査法によって確認したが、同様に実験的場面でも妥当性を検討し、状態自尊感情の主要な研究文脈で広く利用できる心理尺度であることを確認する必要がある。既存の実験的研究では状態自尊感情を変化させるための操作として、たとえば、被拒絶場面を描写したシナリオ（宮崎・池上, 2015）や、過去の最もつらかった失敗経験の想起（田端・池上, 2011）などを用いる。箕浦・成田（2016b）は大学生を対象とした紙筆版質問紙調査で、ポジティブ・ネガティブな出来事の実験をあらわした仮想的シナリオを用い、ポジティブ・ネガティブな出来事の結果を経験した回答者群間の平均値の比較から、状態2項目自尊感情尺度の基準関連妥当性を確認している。既存の9項目の状態自尊感情尺度（阿部・今野, 2007）との有意な正の相関から状態2項目自尊感情尺度の併存的妥当性が、さらに状態2項目自尊感情尺度の信頼性として内的一貫性も確認されている。これらの結果はすべて、学業達成と対人関係といった異なる出来事の場面において同様に確認されている。今後はこの2種類の場面だけでなく、その他の社会的相互作用の場面や、過去のポジティブ・ネガティブ経験の想起・回想による方法についても検討を積み重ねていく必要があるだろう。

第二に、本研究で使用したものとは異なる他の変数との相関関係から、構成概念妥当性を再確認することが重要である。本研究では先行研究との比較に基づく妥当性検討を重視し、これまで複数の研究で関連が検討されてきた出来事の実験頻度および感情状態を測定した。過去の研究では他にも、自尊感情の低下後の回復行動（市村（阿部）, 2011）や、援助要請の回数（脇本, 2008）、将来への期待（福沢・山口・先崎, 2013）といった、状態自尊感情と関連し

て生じる、人の適応的な行動や認知の変化といった側面が検討されている。このように自尊感情と適応の関係性について多方面からの検討を積み重ねていくことによって、2項目自尊感情尺度による状態自尊感情測定の妥当性をより確かなものとしていく必要があるだろう。

#### 引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 16, 36-46.
- Brown, J. D., & Marshall, M. A. (2001). Self-esteem and emotion: Some thoughts about feelings. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 575-584.
- Brown, J. D., & Marshall, M. A. (2006). The three faces of self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem issues and answers* (pp.4-9). New York, NY: Psychology Press.
- 福沢 愛・山口 勸・先崎沙和 (2013). 自尊心のレベル・変動性と将来への肯定的な期待との関連——遠い将来への肯定的な期待が持つ脅威軽減機能について—— パーソナリティ研究, 22, 117-130.
- Gray-Little, B., Williams, V. S. L., & Hancock, T. D. (1997). An item response theory analysis of the Rosenberg self-esteem scale. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 443-451.
- Heatherton, T. F., & Polivy, J. (1991). Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 895-910.
- 市村 (阿部) 美帆 (2011). 自尊感情の高さと変動性の2側面と自尊感情低下後の回復行動との関連 心理学研究, 82, 362-369.
- 市村美帆 (2012). 自尊感情の変動性の測定手法に関する検討 パーソナリティ研究, 20, 204-216.
- 磯崎三喜年 (2009). 自尊感情と自己評価 日本社会心理学会 (編) 社会心理学事典 (pp.30-31) 丸善
- James, W. (1892/1920). *Psychology: briefer course*. New York, NY: Henry Holt and Company. (ジェームズ, W. 今田 寛 (訳) (1992). 心理学 岩波書店)
- Janis, I. L., & Field, P. B. (1959). Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland, & I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven, CT: Yale University Press. pp.55-68.

- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 1013-1022.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. C. (1991). Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 80-84.
- Leary, M. R. (1999). The social and psychological importance of self-esteem. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems: Interfaces of social and clinical psychology*. (pp.197-221). Washington, DC: American Psychological Association.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol.32. (pp.1-62). Cambridge, MA: Academic Press.
- 箕浦有希久・成田健一 (2012). 対人的拒絶の直後反応尺度を開発する試み 感情心理学研究 (日本感情心理学大会発表論文), 20 (Supplement), 17.
- 箕浦有希久・成田健一 (2013 a). 2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討 感情心理学研究, 21, 37-45.
- 箕浦有希久・成田健一 (2013 b). 2項目自尊感情尺度の提案——評価と受容の2側面に注目して—— 人文論究 (関西学院大学文学部紀要), 63 (1), 129-147.
- 箕浦有希久・成田健一 (2016 a). 2項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情測定尺度の開発——妥当性に関する多側面からの検討—— 感情心理学研究, 23, 78-86.
- 箕浦有希久・成田健一 (2016 b). 2項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情の測定——実験的に操作された場面想定法による妥当性の検討—— パーソナリティ研究, 25, 151-153.
- 宮崎弦太・池上知子 (2011). 関係喪失のコストが社会的拒絶への反応に及ぼす影響: 相互依存理論とソシオメーター理論による統合的アプローチ 社会心理学研究, 26, 219-226.
- 並川 努・脇田貴文・野口裕之 (2010). 日本における自尊感情尺度使用の状況と課題 教育心理学フォーラムレポート, FR-2010-01.
- 岡田 涼 (2009). 対人的拒絶における感情経験 感情心理学研究 (日本感情心理学大会発表論文), 17, 238.
- Robins, W. R., Hendin, M. H., & Trzesniewski, H. K. (2001). Measuring global self-esteem: Construct validation of a single-item measure and the Rosenberg self-esteem scale. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 151-161.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ:

Princeton University Press.

Rosenberg, M. (1986). Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self. Volume 3*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp.107-136.

芝 祐順・南風原朝和 (1990). 行動科学における統計解析法 東京大学出版会

Spörrle, M. & Bekk, M. (2014). Meta-analytic guidelines for evaluating single-item reliabilities of personality instruments. *Assessment*, 21, 272-285.

田端拓哉・池上知子 (2011). 自我脅威状況における補償的自己高揚の検討 社会心理学研究, 27, 47-54.

館有紀子・宇野善康 (2000). 日本版状態セルフ・エスティーム尺度の検討 日本社会心理学会大会発表論文集, 41, 206-207.

寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.

Vohs, K. D., & Heatherton, T. F. (2004). Ego threat elicits different social comparison processes among high and low self-esteem people: implications for interpersonal perceptions. *Social Cognition*, 22, 168-191.

脇本竜太郎 (2008). 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 47, 160-168.

脇本竜太郎 (2010). 自尊心の高低・不安定性の2側面と達成動機の関連 パーソナリティ研究, 18, 117-128.

吉田寿夫・石井秀宗・南風原朝和 (2012). 尺度の作成・使用と妥当性の検討 (研究委員会企画チュートリアルセミナー) 教育心理学年報, 51, 213-217.

——箕浦有希久 大学院文学研究科受託研究員——

——成田健一 文学部教授——